

片山裕・大西裕編著

『アジアの政治経済・入門』

(有斐閣ブックス101)

有斐閣 2006年 xiv+300ページ

かわむら こういち
川村 晃一

アジアは多様である。使い古された言葉という感もあるが、これに代わる適当な表現もみつからないし、事実でもある。国も人も多様であれば、当然そこで展開される政治経済の動きも多様なものとなる。

一方、アジアに対する興味は、高まりこそすれ、衰えることはない。特に、1970年代以降に高度経済成長の波が、NIEs, ASEAN, 中国, インドへと広がるなかで、アジアに対する知識の需要も高まった。

それに対応して、アジアに関する書籍も膨大な量が出版されている。現代アジアの政治経済に関する入門書も数多い。しかし、これからアジアについて勉強したいという初学者に自信をもって薦められる入門書が、実は少ない。いずれの入門書も、帯に短し褌に長しなのである。アジア全体の動きを概説するに終わるか、単に各国の現状や制度を並べて解説しただけに終わるものが多い。この2つを有機的に結びつけて、共通の視点の下で、アジア諸国の現状を分かりやすく説明している入門書が欲しいという声は多かったはずである。しかし、アジアという多様な世界を、共通の視点から解説するという仕事は、容易なものではないことも確かであった。

この難しい課題を克服して一冊の教科書にまとめ上げたのが、本書である。本書は、「レント」をキーワードにして、現代アジア諸国の経済成長と政治の関係の説明しようとして試みている。レントとは、「市場における競争を制限することによって生じる『優遇』のこと」で、本書では「権益」とも訳されている。アジア諸国では、市場競争を阻害するレントを排除することによってではなく、むしろ、政府が産業政策を通じて「よいレント」を生み出すことによって、国内の経済活動が促進され、「奇跡」とまで

いわれた急速な経済成長を達成した。しかし、グローバル化の進展とアジア通貨危機に直面した国々は、レントを排除して、市場競争を活用する方向に転換しつつある、というのが本書の視点である。

本書の特徴は、この共通の視点を経済、政治、国際関係のそれぞれの角度からまとめて、読者に「基本的な見方」として最初に提供しているところにある。第1章「工業化とグローバル化」では、「よいレント」を生み出すことによって工業化を成功させた産業政策とそれを主導した政府のあり方について解説するとともに、アジア通貨危機後のレントをなくす改革の背景にも触れている。第2章「政治体制の変動」では、レントを生み出す政策を意図的に作った政府を、より大きな統治の仕組みとしての政治体制のなかに位置づけて、権威主義的な統治の発生と近年の民主化を解説している。続く第3章「アジアをめぐる国際関係」では、アジア諸国におけるレントを活用した工業化とその後の政策変化を、国際レジームと冷戦、グローバル化という国際環境への対応として説明している。

以上の第I部に続く第II部「アジアのすがた」以降では、各国の政治経済のあり方が解説されている。本書で取り上げられているのは、韓国、中国、台湾、インドネシア、フィリピン、マレーシア、タイ、インドの8カ国・地域と国際組織ASEANである。第II部の各国編を執筆しているのは、いずれも第一線で活躍する中堅研究者で、共通の問題意識に基づきつつ、それぞれの国の固有性にも目配りしながら各国の事情が分かりやすく解説されている。

近年高成長の続くベトナムが取り上げられていないのが残念であるが、これまでアジア政治経済論のなかでは共通の問題意識の下で論じられることの少なかった中国とインドという2つの大国が含まれていることは、本書の強みであろう。

アジア諸国の共通性と固有性の双方に目配りの効いた本書は、大学生の教科書としてだけでなく、アジアに興味をもつ一般読者にとっても十分魅力的な入門書である。

(アジア経済研究所地域研究センター)